令和六年十二月度　御報恩御講拝読御書

三三蔵祈雨事

建治元年六月二十二日　五十四歳

仏になるみちは善知識にはすぎず。わがちゑなににかせん。たゞあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば、善知識たひせちなり。而るに善知識に値ふ事が第一のかたき事なり。されば仏は善知識に値ふ事をば一眼のかめの浮木に入り、梵天よりいとを下げて大地のはりのめに入るにたとへ給へり。而るに末代悪世には悪知識は大地微塵よりもをほく、善知識は爪上の土よりもすくなし。

（御書八七三ページ七行目～一一行目）

令和六年十二月度 御報恩御講 『三三蔵祈雨事』（御書八七三ページ七行目～一一行目）

【通釈】

仏に成る道は善知識に値うことに勝るものはない。自分の智慧がいったい何になろうか。ただ熱いとか冷たいとかを知る智慧があるならば、善知識を求めることが大切である。ところがその善知識に値うことが一番難しいのである。そこで仏は、善知識に値うことの難しさを、一眼の亀が大海で浮木の穴に入ったり、梵天から糸を垂らして大地に置いた針の穴に通すことに譬えている。しかるに末代悪世には、悪知識は大地を微塵に砕いた数よりも多いが、善知識は爪の上に乗る僅かな土よりも少ないのである。

【主な語句の解説】

三三蔵…中国真言宗の善無畏・金剛智・不空の三人のことで、三蔵とは経蔵・律蔵・論蔵、またそれに通じている者の意。

善知識…善友ともいい、衆生を教化し成仏に導き入れる者をいう。

一眼のかめの浮木に入り…法華経妙荘厳王本事品第二十七（法華経五八八）等に説かれる。千年に一度だけ海面に浮上する一眼の亀が、自身の背を温め腹を冷やすために適した穴のある栴檀の浮木に値う難しさを、ここでは善知識に値い難いことに譬えたもの。

悪知識…悪友ともいい、善知識に対する言葉。邪悪な法を説いて衆生を迷わす者や仏道修行を妨げる者をいう。

【背景と大意】

本抄は、建治元年（一二七五）六月二十二日、日蓮大聖人が五十四歳の時に身延の地から、駿河国富士郡西山（静岡県富士宮市）の西山入道に対して与えられた御手紙です。御真蹟は総本山大石寺、他一カ所に蔵されています。

内容はまず、衆生の成仏は自身の智慧を頼るのではなく、善知識に基づいて実践することに依ってこそ叶う旨を示されます。

さらに末法の今日、頼るべき仏法の中にも正邪があり、正法を知る判断基準として「日蓮仏法をこゝろみるに、道理と証文とにはすぎず。又道理証文よりも現証にはすぎず」（御書八七四）と、三証を示されています。その実例として、三三蔵が玄宗の時代に祈雨を行い、国土を乱す悪果を招いたことを挙げ、真言宗の邪義を破折されます。

また、妙法弘通には悪口・流罪等の法難が伴うが、そのなかにあって死身弘法の信心を貫くことの大事を促され、最後に、西山入道が過去世からの宿縁によって大聖人に帰依し御供養を実践している、その志を称賛され、筆を置かれています。